

幼児教育第二世紀の曙に望むもの

根 岸 草 笛

(一) この春、ある学会で「幼保一元化と小学校の問題」というテーマのシンポジウムをききましたが、その時に、相も変わらず小学校の高姿勢に対する幼稚園の低姿勢、保育所の中腰姿勢という古風な情景を眺めて、それを悲しむというより、むしろカリカチュアを見ているようなコミカルな気持ちにさせられました。

子どもはいきなり母の胎内から角帽を被って踊りであるものはありませんから、申すまでもなく教育は幼い時期ほど重要であって、幼児教育者が正しい児童観を把握して、明確な教育目的を定め、発達に即した教育方法で教育すれば、神経症的に小学校を意識しなくとも、日本人あるいは世界人として通用する望ましいパーソナリティーの萌芽を培うことが可能であり、その幼児が小学校へ進めば当然のこととしてじゅうぶんに適応できるはずです。

それに引きかえて、小学校では新入児の保育歴を熟知せず、

基礎調査もよく行なわないで、どうして「まともな教育計画」を構成することができますか？ 小学校こそ手をさしのべてデータを求め、協力を要請しなくてはいけませんのに、現実はその反対になっています。

私はそもそも国が教育課程の改訂を、大学からはじめて幼稚園を一番最後に行なったことが大きな間違いの源であると共に、大学教授が一番偉くて幼児教育者がビリというつまらない社会的通念を打ち砕かなくてはいけないと思います。といつてもノーベル賞クラスの学者まで同じ床まで引きさげて考えようとするほどの傲慢さを持ち合わせてはおりませんけれど、少なくとも小学校教師の方が何時までもシラノ・ド・ベルジュラックの帽子の羽根のように、第三者から見れば、あつてもなくとも全く無意味な自尊心(?)を深く捨て去って、勝れた保育者の実践の中から多くを学びとるといふ姿勢になつて欲しいと思ひます。

(二) また幼児教育界でも前述のテーマのように、幼保一元化、などと常に幼稚園を上位におくような言葉づかいからまず改め、(これは保育所側にとっては咽喉に刺った小骨のように不快なことであり非礼でもあります) 保育施設の、あるいは幼児教育の一元化という正しい表現がなされるように望みます。

現実の問題として、対象の差こそあれ、良心的な施設における両者の内容は、不当に差別することが困難なほど進歩していますし、既に一元化の試みが各地で行なわれつつあることですから、お互いに尊重し合うのが当然です。

(三) 幼児教育義務制化の問題もたゞ前としてはもちろん実現されることを期待しますが、その方法論が未熟で危険を伴っています。もしも現在のままの体制でただ一年下に水増しして、年長児にハイヒールを履かせ、実質的には小学生の仲間入りをさせようとするのであれば、これはもう全くお話になりません。小学校教育を蝕んでいる数々の病原菌の中で、教育課程はもちろんです。特に教授法がおちこぼれその他の致命的な病根になっています。

そこで私たち幼児教育者の要望は「八歳までは保育施設で行

なっている保育の形態をそのままつづけて行なわれること」の方が、心身の発達に即しているということですが、

それを現在の制度では六歳で無惨にたち切られています。子どもの心身の発達は六歳では、ほどよく固まった一節になつて、強い圧力に抵抗できるところまで到達しません。

永久歯の全部が一時に生え替わることなく、五、六歳から八歳頃までの間にゆっくりと生え替わりますように、心理的にも身体全体を使って考える具体的思考から、前頭葉の司る抽象的思考への移行にも時間を必要としますから、せっかちにせきたてて変化させることにも大きな無理を伴います。にもかかわらず一例をあげれば、かの悪名高き「集合」まで一年生から押つけてきました。

科学の進歩は人類にいろいろな便宜を与えてはいますけれど、それは決して最高の幸せをもたらしてくるものではなく、教育の究極の目的でもないことを再考して、人間が人間の子どもを、人間として育てるためには、心身の発達を無視した教育制度から先ず改められなくてはいけないと思えます。

この考え方は決して新札のようにバリバリした新しいものではなく、敗戦直後に一時心ある人たちによって、「幼年教育という構想で幼稚園から低学年までの時期を一貫したカリキュラム

で教育して行こう」という発想をもとにフットライトを浴びたものですが、皆さんも御存じのように、この大変貴重な考え方も、地味な研究なので飽きやすい日本人の中では定着せず、一部を除いて大方は凋みました。

それを私がまた提訴したいのは、当時はカリキュラムのことを主として問題にしましたが、どのようにカリキュラムが完璧でもその形態がメチャクチャでは、生きている人間の子どもを酸欠状態に陥れる心配があるので、再び強く、「保育の形態」に対する注意を喚起したいからであります。そして、幼年教育の構想が一時の切花的な美しさでなく、大樹のように深々と日本の教育界に根をおろして欲しいと切望している次第です。

(四) 次に「小学校がクシャミをすれば保育施設が風邪をひく」式の自主性喪失の問題ですが、終戦直後のカリキュラム論議のはなげなしかつた頃に、私はよく「借りてくるからカリキュラム」という悪口をかけた覚えがあります。当時は幼稚園が小学校、保育所が幼稚園の模倣をして、兎にも角にもブレハブ・カリキュラムを急造しましたが、その貸し主の方の小学校も種本はアメリカのカリフォルニア州やバージニア州から借りてきたものですから、あまり威張られた義理のものではありませんでし

たけれど。別な角度からもう一度幼児教育の歴史を省みれば「保育要領」の時代には、まだみずみずしい保育のエスプリが溢れていました。あまり科学化系統化されていない、素朴な構成法でしたが、そこには幼児たちの成長に必要な太陽と風、蜜とレモンが程よくあつて、発達に即した「あそび」と「生活指導」がありました。

それが昭和三十年代から「保育」という大切な言葉が教育という用語に変わり、保育要領が幼稚園教育要領になり、小学校の指導主事あがりというような場ちがいの指揮者がタクトを振るようになってから、幼稚園は急速に学校側に傾斜して、幼児教育の香気が失せ香港フラワーになる園が増えました。この点はいくよく反省し本来の姿にたち帰られたいものです。

(五) また保育界の体質の中にも自主性が欠如しています。幼児の自主性や創造性を重視しているはずの保育者が、幼児教育のスタート時代にはフレールベルの精神を学んで多くの幸せを幼児にもたらしましたが、一面では恩物に擬って幼児を苦しめました。その桎梏からは、偉大なる恩師倉橋惣三先生その他が子どもたちを解放して下さいましたが、バイオリンの早教育が流行すれば園をあげてその方向に走り、アメリカのヘッドスタート・

プログラムが紹介されれば資料にとびつき、ヨーロッパでもモンテッソーリ・メソッドがリバイバルすれば、またたちまちその精神よりも「教具」に執着して私たちが一度物置に仕舞いこんだ教具の塵を電機掃除器に吸いこませて再びそれをつぎだし、「子どもが自発的にしています」などというお定りのうたい文句で結局は動物の子どもと同じように、歩き廻りよじ登り喚き散らしたい子どもたちの口まで封じて、長時間サイレント映画の再上映のような園内を、恐れ気もなく見学大歓迎という所もあります。古い表現ですが、何故風にそよぐ葦のようにフラフラしてはいけないうのでしょうか。もっと凛然とした主体性の確立を求めます。

(六) そしてまた前述の保育の形態についても、内輪同志の私の本音を吐けば、小学校の教授法を云々する前に保育者の主体性の乏しさが、つつかれれば泣き所になると思います。

最近「縦割り保育」の形態が問題にされていますが、ちょっと保育誌に掲載されるとすぐ雪崩現象でそちらへのめりこみます。日本人は善玉？ 悪玉？ 式の二者択一的思考方式が強いのでそういう現象が起こりがちなのです。

自由保育（このあいまいな言葉に私は多くのクレームをつけ

てはいますが、本質的には最も尊重されねばならない形態です）、一斉保育、縦割り保育、この三者のいずれにも長所と短所が必ず存在しています。従って一日中一つの形態で終始しようとするような的外れの愚かしい研究態度を、きびしく反省すべきです。そして、研究の焦点は、各々の長所のみを保育内容の目標に従ってどのようにデイルー・プログラムの中に最も適切に位置づけするか、という点が重要ポイントであることを理解し、ファクションに支配されぬことを望みます。

(七) 以上の諸問題を解決する一つの緒として、保育者養成制度への提言があります。

保育の現場を見ると、子どもたちのしく遊べないで授業ばかりしている変にひ弱い労働者が増えています。その原因は単位さえとればトロトロと押し出されてくるという制度と、保育者養成の大学や専らに子どもと一緒に遊ぶととてもたのしい、しかし抱きあげるには体力が要る、という経験を持った教授が少なくない、あるいは全然いたために、在学中に保育のエスプリが養われずに卒業してしまうということ、時間の少ない短大や専らでは「実習」がひどく軽んじられ、アクセサリー的な科目が多すぎるということが大きな原因になるといえます。

また、幼児教育者養成に対する過去現在未来に亘る全体的な見通しを持った学長や、保育現場の経験を持っている保育原理の担当者が極度に不足し、その反対に経験だけで理論を持ってない教官の数さえ足りなくて、保父の卵の入学にあわてふためいている所もある、ということも考慮されるべきだと思います。

現在から約半世紀ほど前に、私をはじめ保育者の路を歩みはじめた頃には、自分がこの手に抱いているみどり児たちが大人になる時代には、祖国日本に理想社会が実現するとう確信、あるいは白昼夢を食べて生きることができました。その施設は貧しくサラリーは低く世論の支持も乏しかったのですが、保育者の大部分は（ポランティアを含めて）文字通りに己の仕事の中に生き甲斐を感じることができました。私自身も戦時中には一日十四時間保育四回給食という重労働に幾度か倒れましたが、倒ればまたその病院のベッドの上で原稿をかきました。そんな無理を、昭和元禄時代の労働者意識に目覚めた、あるいは目が眩んで自分しか見えなくなっている若い方に強制しようとは決して考えてはいませんけれど、せめて沢山の小さい大衆と良い教授、実習システムの確立によって、保育のエスプリの磨かれた保育者、教育労働者を養成できる制度を求めます。

そしてすべての幼児教育者は四年制の大学に学び、研究者指導者を目指す人のためには大学院大学がその必要を満たすほどに増設され、資格は保育者も小学校教師も共通にして待遇の格差も是正されれば、私の願いはほぼ達成されることになりましよう。

(八) 行政的には児童省ができ、保育所は厚生省、幼稚園は文部省、ミルクは農林省、ベビー服は通産省 e t c 式の子どもの八ツ裂き状態が改組されねばなりません、それを幼児教育第二世紀の初期に直ちに実現させる可能性は残念乍ら稀薄ですから、さしあたりは保育者養成制度の改善から手をつけて欲しいと思っております。

そして、西暦の二十世紀は地上の各国が戦火に見舞われて、却って子どもの幸せを阻害することの方が多かった気がしますが、若しも以上の私の祈りがかないますならば、我が国の幼児教育第二世紀こそ、真の意味の子どもの世紀に近づけることができましよう。愛する子どもたちのために、我が身の拙さを省りみず数々の苦言をお許しください。

(自然幼稚園・草笛保育園・本名山下草笛)